



歩いて知るきのくに歴史探訪

根来寺再発見

古絵図で歩く根来寺周辺文化財マップ

根来寺大塔：根来寺提供



上段左：漆塗梘出土状況（根来地区普通農道整備事業）
上段中：地藏石仏（県道泉佐野岩出線道路改良工事）
上段右：一石五輪塔（県道泉佐野岩出線道路改良工事）
下段右：円明寺御影堂拝殿
下段左：半地下式倉庫（広域営農団地農道整備事業）



根来寺は、平安時代後期、興教大師かみくぼん覚鑑により創建された新義真言宗の総本山です。その前身は、覚鑑が高野山に開いた大伝法院にあると言われ、鳥羽上皇の手厚い庇護のもと高野山上で隆盛を極めるものの、金剛峯寺方の勢力との衝突により、12世紀中頃に根来の地に移ることになると伝えられています。その後、栄華を極めていたものの、1585年の羽柴秀吉による、いわゆる「天正の兵火」で壊滅的な打撃を受けます。江戸時代に徳川の庇護のもと主要伽藍が再建され、現在の根来寺境内の風景となりました。

現在は、多くの発掘調査成果や、山内の整備も進められ、国宝の大塔をはじめ中世の寺院跡として重要性が高いと認められ、主要部が国の史跡に指定されています。

根来寺境内及び周辺には、国宝の大塔をはじめ、重要文化財・史跡・名勝と多くの文化財が存在します。「古絵図で歩く根来寺周辺文化財マップ」では、発掘調査の成果を中心に根来寺とその周辺の歴史を紹介します。古絵図を手に、根来寺周辺の再発見をしてみましょう。

調査名・調査の原因（主要発掘調査箇所）	
①	根来寺坊院跡発掘調査（円明寺）
②	広域営農団地農道整備事業に伴う発掘調査
③	根来地区普通農道整備事業に伴う発掘調査
④	一般国道24号京奈和自動車道建設に伴う発掘調査
⑤	旧県会議事堂移転予定地における発掘調査
⑥	西ノ山城跡 県道泉佐野岩出線道路改良工事に伴う根来工区発掘調査

史跡・建造物・名勝	
A	根来寺境内
B	多宝塔（大塔）
C	大師堂
D	大伝法堂
E	不動堂
F	光明真言殿
G	大門
H	蓮華院
I	律乗院
J	円明寺
K	根来寺庭園
L	旧県会議事堂
M	行者堂
N	聖天堂

■	国宝・国指定・重要文化財
■	県指定文化財
■	市指定文化財

■	主要発掘調査箇所①～⑥
■	発掘調査箇所

根来寺遺跡内の発掘調査位置図

旧和歌山県会議事堂移転地の発掘調査

発掘調査は、平成16・17・22・23年に和泉山脈から派生した丘陵の先端部、現大門から北約280mの旧県会議事堂移転地などにおいて行われました。調査が行われた場所は丘陵頂部から西側への斜面及び斜面の上下に広がる平坦面です。調査では、斜面に階段状遺構を配置し、上段・下段の平坦面には子院を構成する区画溝や石垣、井戸、半地下式倉庫などの遺構が確認されました。また上段から下段にかけての排水施設は計画的に配置され、地形を利用し、子院配置を行っていたことが窺えます。遺物は、半地下式倉庫の瓦礫を含んだ埋土から、組合せ式の鯉瓦の破片が出土しており、1580年代に製作されたものと考えられます。なお、現代整備事業に伴い再調査が行われています。



半地下式倉庫（西から）



階段状遺構（西から）

旧和歌山県会議事堂 重要文化財

旧和歌山県会議事堂は明治31年（1898）年に和歌山城の濠端（和歌山市一番丁）に建てられました。正面の車寄せなどの細部を寺社建築に用いられる意匠でまとめつつ、小屋組にトラス組を用いるなど近代的な技術も採用している近代和風建築です。明治時代に和風意匠で建てられた木造の府県会議事堂としては現存する唯一の遺構です。

建築当初は「本館」「議場」「控室」からなる「エ」型平面で、背面側には物置、便所などの「付属棟」がありました。昭和16年に美園町に移築、さらに昭和37年に根来寺本坊の南側に移築され、山号にちなんで「一乗閣」と名付けられ寺の施設になりました。今回の修理に伴って、現在の場所に三度目の移築を行いました。

正面の外観は建築当初と大きな違いはありませんが、一度目の移築の際「控室」がなくなり「T」型の平面となり、さらに議場の向きが反転されるなど大きく改変されていることが、昔の県の書類や柱など部材の痕跡からわかりました。今回の移築では建築当初の姿に復元されています。付属棟は現存しませんが、現在鉄板葺きとなっている本館庇で、修理前に使われていた瓦が付属棟のものである事がわかりました。これらの瓦は付属棟の存在を示す唯一の資料として、修理で再利用できなかった部材とともに、地下の免震ビット内に大切に保管しています。



県会議事堂トラス組立

広域営農団地農道整備事業に伴う発掘調査

円明寺周辺の盆地部、蓮華谷の谷部とその両側の丘陵部で、昭和63～平成2年に発掘調査が行われました。特に谷部は、土盛りにより敷地を谷の奥に拡張し、高さ4mにも達する城郭を思わせる高石垣などで区画されていました。また深さ約2mの半地下式倉庫も確認され、粘土貼りの四周の壁は真っ赤に被熱していました。本発掘調査で出土した遺物は中国製磁器や国産陶器の他に銭貨、青銅製の錫杖・独鈷とっこ・賢瓶けんびょう・六器などの仏具、鉄砲玉や金メッキを施した刀装具、黒漆で院名や人名を記した漆塗（根来塗）碗などが出土しました。



高石垣（西から）

普通農道整備事業に伴う発掘調査

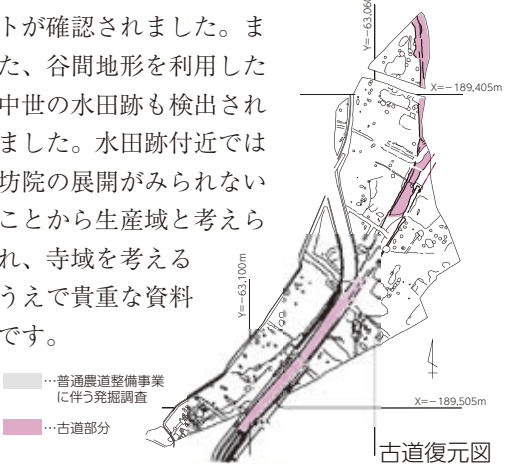
蓮華谷のほぼ中央を縦断する農道整備に伴い、昭和59～62年に発掘調査が行われました。この農道は、中世にも存在していた道を踏襲しているといわれ、天正13年の兵火の折に、秀吉軍がこの道を通して山内に押し入ったと言われています。発掘調査で検出された道は、10～15m間隔で石敷きを施し、その道の側溝が基幹水路となり各坊院の排水溝が取りついていました。また半地下式倉庫や井戸なども検出され、院名を記した漆塗碗もまとめて出土しました。



調査区全景（南西から）

一般国道24号 京奈和自動車道建設に伴う発掘調査

調査は平成23～25年に行われ、坊院跡と考えられる暗渠排水施設や石垣、半地下式倉庫が検出されました。市道桃坂線を挟む調査区では、昭和62年度の発掘調査で検出された古道の北への延長ルートが確認されました。また、谷間地形を利用した中世の水田跡も検出されました。水田跡付近では坊院の展開がみられないことから生産域と考えられ、寺域を考えるうえで貴重な資料です。



古道復元図



堀SH2の石造物出土状況（南東から）

歩いて知るきのくに歴史探訪 ～根来寺再発見～ 古絵図で歩く根来寺周辺文化財マップ

平成30(2018)年9月7日発行
発行/公益財団法人和歌山県文化財センター(〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1)

*この見学会は、平成30年度国宝重要文化財等保存・活用事業費(地域の特徴ある埋蔵文化財活用事業)の補助金を受けて実施しています。

■ 大門 県指定文化財

天正の兵火前の規模は不明ですが、現在の大門は、初重・二重とも桁行五間、梁間二間とする大規模な五間三戸、二階二重門です。弘化2年（1845）に棟上げ、嘉永5年（1852）に竣工しました。初重は、中央三間は扉を入れずに吹き放し、両端間には仁王像を安置しています。二階には釈迦三尊像と十六羅漢像が安置されています。近世末の建物ですが、大寺院の表門にふさわしい堂々とした門です。この大門建立をもって江戸時代の根来寺復興事業が終了しました。



大門（写真：根来寺提供）

■ 蓮華院・律乗院

宝暦元年（1751）に紀州徳川六代藩主宗直によって学頭寺院として定められた寺院で、行人房及び、行人衆を排除し、碩学者や有識者を多数招き入れ教学にあたったと言われています。また、一山の寺坊はこの2寺院のどちらかに属し、藩領内の真言宗新義派の寺院も末寺になることが定められました。特に蓮華院は、根来寺の幹線道に面した間口30間もある威風堂々の大寺院で、根来寺伽藍古絵図にも院名のみですが、見出すことができます。



蓮華院（写真：根来寺提供）



律乗院（写真：根来寺提供）

■ 円明寺

宗祖覚鑊が高野山と袂を分かち、根来の地の豊福寺に入住します。高野大伝法院の末寺となっていた経緯もあり、この地を選んだと言われています。その後、康治2年（1143）に豊福寺内に、円明寺と神宮寺の建立供養が営まれ、根来寺の歴史の第一歩となった円明寺と神宮寺は高野大伝法院と同様に学問寺として機能していきます。覚鑊が根来の地で過ごした歳月はわずかで、この円明寺の西縁で入滅したと言われています。



円明寺周辺調査状況

平成元年（1989）に円明寺境内の発掘調査が実施され、木枠組の井戸や両側に縁石を伴う約15mの道や基壇が検出されました。検出された道の周辺には多量の五輪塔・地藏尊・宝篋印塔などの石造物が集中して出土しました。また、御影堂の前庭の石燈籠に刻まれている年号から元和8年（1622）以前には復興されていたと考えられます。

～古絵図

「根来寺伽藍古絵図」 根来寺蔵 解説～

江戸時代 県指定文化財

根来寺伽藍古絵図は、室町時代後半（16世紀）頃の根来寺最盛期の境内の様子を描いた絵図です。図中に「興教大師拝殿」の文字があることから、覚鑊に大師号が追贈された元禄3年（1690）以降に制作されたものと推測されます。当時、争乱の中で根来寺の境内の範囲を主張する目的もあったと考えられ、北の境界は和泉山脈中腹の押川集落付近の金剛童子社を含み込む形で描かれています。絵図の右端に、日輪（太陽）と月輪（月）を描き、多くの人物描写もみられることから、参詣曼荼羅図的な要素をもつものと考えられます。

和歌山県立博物館 HP より



古絵図で歩く

根来寺周辺文化財マップ

歩いて知るきのくに歴史探訪 根来寺再発見

- 国宝・国指定・重要文化財
- 県指定文化財
- 市指定文化財

■ 大塔 国宝

大塔は、一辺15m、高さ37mのきわめて規模が大きい多宝塔です。一般の多宝塔は下層の柱間は三間ですが、大塔は五間あり、内部に柱を円形に配置して内陣・外陣に区画されています。このような平面を大塔形式と呼びます。金剛界曼荼羅から、大塔は真言密教の主、大日如来であるとされています。内陣は胎藏界曼荼羅の中心、中台八葉院が仏像によって立体的に表現されています。

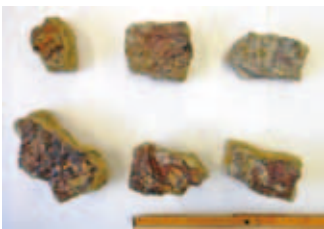
戦前の解体修理で発見された墨書から、文明12年（1480）頃に着工し、明応5年（1496）に心柱を立て立柱式が行われ、その後工事が続けられ、天文16年（1547）に67年の歳月をかけて完成したことがわかります。

この塔は、大塔形式を伝える現存唯一の建物として貴重なものです。

平成24に行われた伽藍内での発掘調査において、大塔の前庭で土師器皿片や溶解炉破片が出土しました。



大塔（写真：根来寺提供）



溶解炉破片

■ 大伝法堂 県指定文化財

大伝法堂は、室町時代の丈六仏三体を安置する桁行三間、梁間二間、裳階付、入母屋造本瓦葺の風格のある大堂です。大伝法堂は天正の兵火を免れましたが、秀吉は京都に寺を創建するために、三尊像とともに大伝法堂を解体し搬出しました。しかし、寺の建立は実現せず、大伝法堂の部材は積まれたまま朽ち果てたといわれています。この後三尊像は根来寺に戻りましたが、堂の建設は遅れていました。再建は紀州徳川家八代重倫と母を大旦那として進められ、文政7年（1824）に棟上げが行われ、同10年に三尊像の修復が終わりました。

平成24年には初めて伽藍内の発掘調査が行われました。その際、大伝法堂の南東で3段ないし4段の石垣が検出されています。この石垣は垂直に築かれ、応永年間（14世紀末～15世紀初頭）に建てられたとされる、前大伝法堂に関係するものと考えられています。なお、この調査では、普遍的に根来山内で検出できる天正の兵火時（1585年）の焼土が確認されていません。



大伝法堂（写真：根来寺提供）



石垣検出状況

■ 大師堂 国宝

大師堂は、大塔の南西に建つ桁行・梁間とも三間の宝形造本瓦葺の小規模で簡素な建物です。内部は後方に寄せて来迎柱を立て、仏壇を構え、春日野子に弘法大師像を安置しています。この弘法大師像は明徳2年（1391）に開眼供養が行われました。大師堂の建築年代を明らかにする棟札などの資料は確認されていませんが、長く延びた舟肘木などの形式は室町時代中期の特色を示しており、本尊像開眼と同じ頃に建てられたと考えられます。大塔とともに、天正の兵火を免れた数少ない建物です。



大師堂（写真：根来寺提供）

■ 近世の根来寺

天正の兵火（天正13年・1585）で大塔や大師堂は焼け残りましたが、その他の坊院は灰燼に帰しました。慶長5年（1600）に徳川家康により再興が許可され、徐々に学侶や行人僧が帰山するようになります。しかし、復興は簡単には進まなかったようで、この状況は、発掘調査でも垣間見ることができます。近世の遺物がまともに出土するのは根来寺の中心部で、一方でかつて坊や院が谷一面に立ち並んでいたと考えられる箇所からは、遺物や遺構は皆無に近い状況です。



紀伊国名所図会

■ 根来寺略年表

西暦・年号	事 項
1095（嘉保2）	覚鑊上人、肥前国藤津荘（現在の佐賀県鹿島市）に生まれる。
1114（永久2）	覚鑊上人、高野山へ初参する。
1132（長承1）	高野山に大伝法院・密蔵院を建立、鳥羽上皇らが参詣する。
1140（保延6）	高野山を離山し現在の根来寺内、豊福寺（ぶふくじ）へ移る。
1143（康治2）	豊福寺内に円明寺・神宮寺を建立。覚鑊上人、円明寺において入滅。
1205（元久2）	根来寺という呼称がこの頃までに成立する。
1288（正応11）	頼瑜（らいゆ）、高野山上の大伝法院の活動を根来に移す。
1391（明徳2）	根来寺大師堂（重要文化財）が建立される。
1547（天文16）	根本大塔（国宝）が完成する。
1585（天正13）	羽柴（豊臣）秀吉の紀州攻めにより炎上する。大伝法堂・大塔・大師堂等は焼け残るが、本尊の三尊像は京都嵯峨へ運び出され、大伝法堂も解体される。
1600（慶長5）	徳川家康、根来寺再興の許可を与える。
1827（文政10）	大伝法堂再建される。
1852（嘉永5）	大門が建立される。
1976（昭和51）	根来寺山内で発掘調査が始まる。
1980（昭和55）	根来寺坊院跡本格的な発掘調査が始まる。